☆ 子ども会（学習会）だより ☆

MY SKY 第13号

マイ スカイ

1996年7月9日火曜日発行（毎週火曜日定期発行）

発行者
板野中学校
学習会
編集・文責：吉成正士

毎日じめじめしたお天気が続きますね。おかげで七夕の日も雨模様のお天気になってしまいました。天の川をはさむ牽牛織女は，今年も会えなかったようですね。

この牽牛にあたるのが彦星で，織女にあたるのが織女星と呼ばれています。彦星はわし座の星でアルタイルとも呼ばれており，織女星はこと座の星でベガとも呼ばれています。この二つの星と，白鳥座のしっぽにあたるところにあるデネブと呼ばれる星を合わせて，『夏の大三角形』といいます。夏の夜空を見上げて，見つけ出してみてください。

でもこれらの星の光も，出発したのは何千年も何万年も昔で，もしかすると今はもう爆発してなくなっているのかもしれません。そう考えてみると，今見える星の光に，はるかなる時の流れを感じます。人間てちっぽけですね。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◎板野中学校新聞特集！！

7月4日，徳島の郷土文化会館で，シャンテというロックバンドのコンサートがありました。券を5枚持っていたのですが，引き取る人がなく，（私はその時，四国同和教育研究大会で，高知県に行ってて行けなかった）仕方なしに，私の通っている板野町手話サークルの知り合いにあげてしまいました。

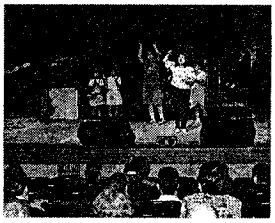
実はこのロックバンド，視覚障害をもつボーカル，ベース，ドラムス三人と，手話ボーカリスト一人の，計四人で構成されています。

演奏や手話で平和の喜び表現

県郷文でコンサート

徳島市大空襲のあった七月四日，平和について考える「七・四 平和コンサート」（同コンサート実行委員会主催）が同日夜，徳島市内の県郷土文化会館であり，約五百人が参加した。

コンサートには視覚障害者の演奏と手話ボーカルで構成する大阪のロックバンド「シャンテ」が出演し，オリジナル曲「愛が叶（かな）うように」など十三曲を披露。ギターの熊野伸一さんの澄んだ音色、手話ボーカリストの山本智子さんの〝全身を使った歌声〟に、会場からは惜しみない拍手が送られた。



会場が一体となって繰り広げられた「七・四 平和コンサート」＝県郷土文化会館

ラスト曲「花」では会場全体が手話で合唱。熊野さんが「平和だから僕らは音楽ができる。徳島も空襲の焼け跡に『平和の花』が今咲いている。もっとすてきな花をみんなで咲かせよう」と呼びかけた。

手話サークルに通っている名西郡石井町高原、保母の佐々木和枝さん（三二）は「彼らのひたむきな姿に感動した。私も手話を通じて、もっと頑張らねば」と話していた。

そして，後日観に行った知り合いと会うなり「すごかった」「すごかった」の連発でした。表現のしようがないくらいに興奮してました。ビデオを買ってきたというので借りましたが，やはりすごかったです。

見たい人はご連絡をどうぞ！！

ちなみに，ビデオの最後に出ていた彼らの言葉を載せておきます。

『自分と隣りの人間を比べるなんてつまらないことさ

大切なのは，自分がどこまでできるかってことだと思う』

『限りなく高い世界へ，限りなく広い世界へ，この足使って歩いて行こうよ』

やさしさの声

2つの沖縄を見た修学旅行

沖縄はもう梅雨入りしたそうだ。ちょうど一年前、沖縄へ行った修学旅行を思い出す。やはり梅雨入りの時期だった。

青い海と碧（あお）い空を夢見て行った沖縄は、確かに輝くパラダイスだった。だけど、輝くパラダイスが過去に戦場だったということを、そして今も米軍基地を抱えているということも、忘れてはならない。

私は修学旅行で、青い海の横に基地を見た。碧い空を横切る戦闘機を見た。私はあの旅で「沖縄」と「オキナワ」の二つの沖縄を見ることができた気がする。

これから夏にかけて、沖縄へ行く人がいると思うが、私は「沖縄」のついでいいから「オキナワ」を見てきてほしい。ひめゆりの塔を、南端の平和祈念公園を、嘉手納をはじめとする米軍基地を、そして日本で唯一の地上戦が行われた「オキナワ」の傷跡を。徳島のみなさん、徳島と沖縄の距離は遠いけど、気持ちは近づけておこうよ。（坂野町、YN・17歳・高校生）

また，５月１３日にまでさかのぼりますが，徳島新聞の読者の手紙の欄に「２つの沖縄を見た修学旅行」と題して投書がありました。現役板中生ではありませんが，明らかに板中卒業生の文章でした。平和問題を考える上で，オキナワの問題は外すことができません。部落問題学習や全体学習が，そういうことについて深めさせてくれたのかもしれません。そうであれば，本当に素晴らしいことだと思います。

高校も「修学旅行」という視点でみれば，結構楽しいかもしれませんよ。

なおこの後，板中の点字クラブについて載っていた記事を紹介しておきますので，見てみてください。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

◇ これからの日程 ◇◇ ◇

７月11日(木)～15日(月)　三者面談

13日(土)　徳島県部落解放中学生集会第３回実行委員会(13:30～：不動総合センター)

14日(日)　やさしくなろうコンサート(2:00～：文化の館さくらホール)

15日(月)～17日(水)　校内合唱コンクール

16日(火)　『MY SKY 第14号』発行日

19日(金)　１学期終業式

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼

最後のページは，この春に朝日新聞に掲載されていた３連載の２回目です。読んでみてね！

点訳絵本 生徒らに人気

米の障害者教育担当者 板野中にお礼の手紙

板野郡板野町の板野中学校・点字クラブ（田伏一弘部長、十九人）が今春、アメリカ・バージニア州在住の視覚障害者教育担当のアンナ・スウェンソン教諭に送った英語版「点訳絵本」へのお礼の手紙が二十五日までに同中に届いた。手紙には「生徒たちは点字本をとても気に入っており、また点字の絵も楽しく鑑賞している」などと書かれており、クラブ員らは「早速返事を書いて、交流の輪を広げていきたい」と喜んでいる。

同クラブは、点字絵本の会会長の寒川孝久さん（七）＝北島町江尻＝の指導を受けながら一月から英語版の点訳絵本づくりに着手。三月末までに「美女と野獣」や「人魚姫」など十種類を完成させ、寒川さんの紹介などで同教諭のほか、ニュージーランド・クライストチャーチ市のエルムウッド小学校視覚障害者センターに送った。

手紙には、感謝の気持ちや同クラブへの質問などのほか、ワシントンの絵はがきも同封。顧問の三木健司教諭は「生徒たちも礼状をみて一段と張り切っている。新しい英語版も作って送りたい」と言っている。

同クラブは、昨年四月から同校のコンピューター室に週一回集まり、専用ソフトを使って絵本の文章だけでなくイラストも点字で描く点訳絵本作りに励んでいる。これまでに「一寸法師」や「ピーターパン」など日本語版の点訳絵本十六種類を作成し、全国各地の盲学校四十二校に寄贈している。

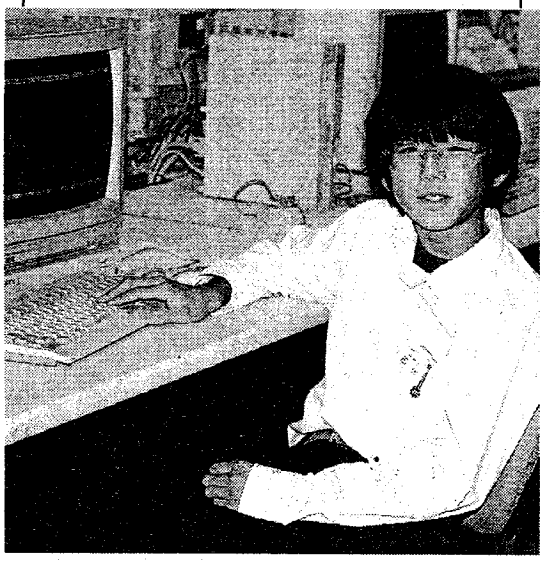
スウェンソンさんからのお礼の手紙を読む板野中の点字クラブ員ら＝同校

青春フォーカス

感謝の手紙 次々と

点訳絵本を作り全国の
盲学校や海外に送っている
板野中学点字クラブ部長

田伏 一弘君 (14)



県内の中学・高校で点字クラブがあるのはここだけで、全国でも極めて珍しいという。昨年四月の発足以来、北島町点字絵本の会会長・寒川孝久さん(モ)の指導を受けながら、点字専用ソフトを使って「一寸法師」などの日本語版、「アラジン」など英語版の点訳絵本合わせて二十六種類を制作。全国各地の盲学校四十二校とニュージーランドなど海外の視覚障害者施設二カ所に贈る活動を続け、同クラブへの感謝の手紙が後を絶たない。

部員は現在十九人。週一回コンピューター室に集まり、一人一冊ずつ、半年かけて絵本を仕上げていく。田伏君もこれまでに「三年ねたろう」や「スヌーピー」などを手がけてきた。「初めのころは点字が珍しく、面白いからやっていたんです」。ところが、ある話を聞いて考え方が変わった。

点字クラブができる以前の一昨年秋、板野中学の生徒が点訳絵本を徳島盲学校に寄贈した。そのとき、生徒が「みなさんの役に立ってあげたいと思って、この絵本を作りました」と言うと、盲学校の先生から「それは、ちょっと違います。何かをしてあげるというのは、相手の立場に立った考え方ではないですよ」とたしなめられた。

このエピソードを聞いたときから、田伏君はボランティアのあり方をまじめに考えるようになったという。「街にある点字は実際に役に立っているだろうか、と疑問を持つようになりました。点字に限らず、障害者のための設備はまだまだ整っていないように思います」。

これからもどんどん新しい点訳絵本を作っていきたいという田伏君。「障害者の差別問題についても勉強していきたい」と意欲を見せた。

三年生。昭和五十七年三月九日生まれ。板野郡板野町犬伏。

「差別」の中で

同和問題の今後

中

結婚の壁　出身地調査　今も絶えず

瀬戸内海に面した愛媛県菊間町に住む和田武広さん(四二)の自宅を今月上旬、若い男女が訪ねてきた。男性は被差別部落出身。女性の家族から「結婚するというなら、娘を殺す」と猛反対されていた。

和田さん夫妻にも、同じ体験があった。

武広さんが妻美幸さん(四〇)と結婚したのは、一九七九年。美幸さんからは「被差別部落出身」を告げられていた。武広さんは両親と二人の姉に相談した。長姉の夫らの猛反対で、家族全員が反対に回った。「あんたのおかげで家がめちゃくちゃになる」と責められ、いったんは断念した。

だが、武広さんはあきらめられなかった。「ぼくは差別と闘う。もう一度、君に選択をしてほしい」と美幸さんに手紙を書いた。二人は再会した。

武広さんの家族・親類で結婚式に来たのは、いとこ二人だけだった。以来十七年間、家族は武広さんを拒み続けた。八七年に父親が亡くなったが、葬式への出席も拒否された。送った孫の写真も、送り返された。

「沈黙したら、差別に負けたことになる」。武広さんは、人権問題講演会などで体験を語り始めた。『はじけた家族』の題で昨年八月、体験記を出版した。若い男女は、その本を読んで、相談に来たという。

□■□

昨年九月、和歌山県内の女性(三七)が、同郷の男性(三七)とその両親に対して損害賠償を求める訴えを和歌山地裁に起こした。

高校の同級生だった二人は、四年近く交際していた。女性が妊娠し、九四年七月、男性は女性に結婚を申し込んだ。だが、男性の親は「結婚はなかったことにしてほしい。子どもはおろして」と要求した。女性は妊娠中絶した。

女性の父の訴えで、運動団体が男性側に、「結婚反対は、部落問題が理由か」とただした。母親は「条件の一つに入っている」と答えた。女性側は「差別を認めて謝罪を」と男性側に求め、家庭裁判所に調停を申し立てたが、昨年八月、不調に終わっていた。

□■□

昨年十一月、東京で開かれた運動団体の集会で、興信所業界の関係者は「結婚に関して、部落出身者かどうか知りたいという相談はかなりある」という内容の発言をしている。

昨年十月に、「部落差別事象の発生の防止に関する条例」を制定した福岡県の同和対策局には「差別で結婚が破談になりそうだ」との相談が、年間二十件近くある。県内の興信所約四十社には、「結婚相手が同和地区出身か知りたい」との問い合わせが、一社当たり年間十数件あるという。

差別意識　二十八日出た地域改善対策協議会総括部会の報告書は、国民の差別意識について「着実に解消へ向けて進んでいるものの、同和関係者との結婚問題を中心に依然として残っている」と指摘する。さらに「人権侵害が生じた際の人権擁護機関の対応は、なお十分とはいえない」と現状を批判し、「人権擁護制度の抜本的な見直し」を求めている。

同様の条例は大阪府、熊本県のほか、約三百五十市町村が制定している。

総務庁が九三年に実施した同和地区の実態調査で、地区外出身者と結婚した夫婦は三七%にとどまっている。同和地区外の住民対象の意識調査では、「相手が同和地区なら結婚させない」との回答が一三%あった。一方で、二十歳代では地区内外の通婚率は六八%と、上昇している。

「若い世代になるにしたがって、結婚をめぐる差別は減っている。結婚は内心の問題で(条例など)法規制になじまない」という見解の運動団体もある。

□■□

肉親らによる激しい部落差別を経験した武広さんは、若い二人の相談に、「何があっても結婚する決意を持って」と励ました。繰り返される差別に、やり切れなさを感じながらも、武広さんは思う。「差別を乗り越えて幸せになった手本を、私たちが示さなければならない」